

女子中学生が幼馴染の女の子を堕とすまでの話

テツポウユリ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼馴染の二人の女の子がなんやかんやあつてくつつく話。

※主人公独白多めです。と言うか独白しかないと言つても過言ではありません。

※タグ通り、ちょいヤンデレです。

※後半暗めです。と言うか全体通して明るくはないです。

目

次

本編
蛇足編

8 1

待ち合わせというのはどうしてこんなにも心細いものなのだろう。ほとんどの人が通り過ぎる中、一人でここに立ち尽くしていると、まるで世界で一人だけが前に進めず立ち止まっているかのような錯覚に陥る時がある。

「ごめんね～、お待たせ」

「おっそいやー」

隣で文庫本を捲つていた黒縁メガネの女子高生が、ガヤガヤした人ごみの中でもはつきり聞こえる高い声を上げる。その声は想像していた以上に甘く、女の子らしさを前面に押し出したような声で、私は勝手に自分と同類認定していたことを恥じるように俯いた。

また一人仲間がいなくなってしまったと心の奥で呟く。

彼女は私とは違つてこの時間に寂しさなんて抱いてはいないのかもしれないが、それでもやはり同志が去つてしまつたような喪失感を感じるのだ。

これで私が来た時の顔ぶれは一新されてしまった。

後は電話で会話を続けていて、誰かを待つてゐる訳ではなきそんな主婦が一人と、今さつき改札から出てきて新聞を広げてゐるご老人がいるだけだ。

まあ元より五人程度しか待ち合わせの為に突つ立つてゐる人なんていない小さな駅ではあるのだが。

ただ人が少ないということは駅員の目が届きやすいということである。小さいながらに一本の電車が交わるこの駅には駅員さんがそれなりに多くいて、さつきから目が合いそうになる度に背筋がひくつとする。

何も悪いことをしていらないのに、誰かに見られると悪いことをしてしまった気になる。もしかしたら通行の邪魔になつてゐるかもしない。あの人はここを通ろうとしたのに塞がれているのを見て内心怒つているのかもしれない。

こうしてキヨロキヨロ周囲を見渡していると、本格的に自分が不審者になつたようで、心が沈み込んだ。

心を落ち着かせるためにコンパクトミラーをポーチから出して、髪を整える。

物調ずら仏頂面の顔。輪郭が丸っこく、頬が少し赤い子供っぽい容姿。幸いなことに家でしつかり梳かしてきた髪は大して乱れていたがつたが、癖で弄り続けた右側の髪だけ僅かに外跳ねをしていた。ぎゅうぎゅうと押さえつけるように髪を梳かすと、余計に広がってしまった。私はミラーをしまうと、そのことを気にしないで気持ちを切り替えるように改札の辺りを睨め付けた。

時刻は午前十時。待ち合わせの時間が来た。待ち人は、まだ来ない。

「ごめんごめん、遅れちゃつた」

耳元で聞きたかった鈴のような声がした時、私は散々待たされた相手でもあるのにも関わらず、どこか救われた気持ちを抱いた。停滞した世界から自分を拾い上げてもらつた、そんな気がした。

相も変わらずお洒落に疎い彼女は今日もワンポイントのラフな白いTシャツに原色のミニスカートを身に着け、手を合わせながら笑つていた。

多分彼女はあんまり悪いことをしたとは思つていない。待ち合わせ時間の十分前には必ずいるようにしている私と違い、大雑把な彼女にとつて三分の遅刻はギリギリセーフに含まれる。

でも私は彼女のそななところが好きだ。

私だつたら許せない、そんなことも笑つて「いいよいよ」と言える彼女は私よりずっと大人だと思う。例えキヤミもつけずに白いTシャツを着て、見ているこつちが冷や冷やするくらい自身の恰好に無頓着だとしても。

私は何度も彼女に救われた。

失敗をして、自分が自分を大つ嫌いになつた時。

「大丈夫だよ」と朗らかに笑つて「美歩が自分のこと許せなくても、私が許してあげるから」と言われた時は本氣で涙を流した。

ときどき私は人から「自分に厳しすぎるよ」と言われるが、多分人ごとだとしたつて許せない。でも私は私を許せなくとも大丈夫。だつて彼女が私を許してくれるから。

ファツションに興味もなく、さばさばしてボーアイツシユ。その上男子と良くつるんでいる彼女は男性的だとよく言われている。

でもそんなことはないと私は思つていて。

彼女はかわいいものが好きなのだ。部屋に行けばぬいぐるみがベッドを占領しているし、マットレスはキヤラものだ。

部屋で使つているシャープペンシルは桃色。だけど彼女は自分のキヤラじやないからと言つて学校には持つていつていねいそうだ。何より、正義の味方の女児アニメ物が今でもちよつぴり好きな彼女は、いつも頭でぐちやぐちや考へてゐる私よりよつぽど女の子らしいと思う。

因みにこのアニメが好きなことを知つてゐるのは私だけだ。

興奮と恥ずかしさが入り乱れた面差しで照れ臭そうに今週の内容を語る彼女は、私のお気に入りの表情の一つだ。

初めて知つた時に珍しく慌てた顔を見せた彼女は、何度も何度も口外しないよう念押しを繰り返した。

だけど言う訳がない。だつてこの表情は私だけのものなんだから。

私は彼女のこの表情を見る度、征服欲というか独占欲というか、とにかく少し苦いけど、甘くて幸せな気分に浸れるのだから。

几帳面と大雑把。価値観の大きな違いはカップルだつたら長続き

しないというけれど、私と彼女の間にはそんなものは関係ない。

新生児室で隣り合つた時からの付き合いだから、かれこれもう十四年になろうとしている。

もちろん生まれてすぐお隣さんのことを意識した訳でもないし、一歳の時に母親同士が再開して仲良くなつたことを記憶で覚えている訳でもない。

それでも物心ついた時からの関係は問答無用に私たちを強く結びつけた。

「日焼け止めくらい付けなよ。私、波留の白い肌結構好きなんだから」少しだけ意識して頬を膨らませると、彼女はカラカラと笑つた。

「私も美歩の膨れた顔大好きだよ！」

「そうじやなくつて！」

彼女は叱られたことを誤魔化す子供みたいに、抱き着くように私の腕を取つた。

顔がにやけそうになるのを抑えて、怒ったふりを続ける。ちよろすぎる自分に呆れてしまふが、幼児期からの刷り込みで、もはやここまでくると本能みたいなところもあるから仕方がない。

「ほら、これ塗つて！」

表情を隠しながら、予め用意しておいた白いクリームの入ったチューブを渡す。彼女は一瞬驚いた表情を見せるが、嬉しそうにそれを手に取り肌に伸ばし始めた。

あ、今の表情かわいい。

心でシャッターを押し、記憶に保存する。でも、無邪気な顔を見て、今からすることに少し胸が痛くなつた気がした。

「今日暑いからさあ、アイス食べようよ」

彼女の声が耳に心地いい。彼女は露店のアイスクリーム屋を顎で示した。

蛍光色で派手な外装をした移動販売車は、その外観に似合わず正統派の品ぞろえだった。

一つずつ買ってまた日差しの中に出ると、先ほどよりもさらにむわつとした風が私たちに吹きかかつた。

「すゞっ……、今日最高三十七いくかもつて」

げんなりとする私を見て彼女は楽しそうに笑つた。彼女はこういうときに良く笑う。私がうわつとした表情をすると、決まってくすぐすと笑うのだ。

でもそれが嫌つてわけではなくて、むしろそうされると私もなんか楽しくなつて笑えて来てしまうのだ。いつの間にか彼女の笑顔を見ると条件反射のごとく、楽しい気分にさせられるようになつていた。

ぽたりとアイスの滴が垂れた。「あっ」と声を上げ勢いよく頭を下げた彼女の鼻から一滴の汗が垂れた。

もつたいない。そんな気持ちを押し隠して、すでに気持ちを切り替えている彼女に声をかけた。今私は何に対してもつたいないと思つたのだろうか。邪な思いを振り切るように軽く髪を払う。

お守りのようにポケットに忍ばせた小さな袋を、強くギュッと握りしめた。

「うち来る？」

「行く行く」

暑さに悶え苦しんだ私たちは、十四時と言う気温が最高になつたところで撤退を余儀なくされた。

せつかくだからと家に誘えば、逡巡することなく彼女は頷いた。今日は親がない。思いがけず、望んだシチュエーションを自然に作ることができてしまつた。

自宅に着いたら、彼女をリビングに通し、エアコンをつける。

「この部屋暑くない？」

顔を火照らせた彼女はとろんとした瞳を瞬かせた。

「待つて、今麦茶用意するから」

冷蔵庫を開ける。同時に何度も握りしめて皺の付いた個包装の袋をポケットから取り出す。表記は『睡眠導入剤』。おばあちゃんの使っていたものをいくつか拝借してしまった。

効果は自分でも試している。飲んでから三十分後には瞼の重さに勝てなくなつた。

こつそりと白い粉を片方のグラスに入れ、かき混ぜる。体で隠しているから見えていないはずだ。睡眠導入剤、という言葉を見るたびに心臓がきゅっと絞まる感触を覚えた。

さつき渡した日焼け止め。実は女性の感度を高める効果があると書いてあつた軟膏だ。正直自分で試した時はほとんど効果がなかつたが、彼女には効いたようだ。

さつきから妙に暑そうに胸元をパタパタと仰ぎ、熱っぽい息を吐いている。

そんな彼女は私が差し出す麦茶を何の躊躇もなく手に取つた。

コクリと小さく喉が動く。よっぽど乾いていたのかそのまま一度三度と続き、コップには四分の一が残された。ゴクリと私の喉が鳴つた。

もうこれで引き返せない。

これでどうとう私たちの友情も終わりだらう。

そんなことを嘆くくらいならば最初からするなと言う話だが、私は我慢ができなかつたのだ。最初に意識したときはまだ隠せた。でも次に思つた時にはその気持ち無かつたことにできるほど、私は器用では無かつた。

心の奥に押し込めて、押し込んで。なのにどんどん膨らんでいく想いに翻弄され続けた。

その過程で歪んでしまつたのだ。そして見ないふりをしていた決

定的な事実に気づいたとき、もうそれは友情でも、愛情でも無くなつてしまつた。

私たちは恐らく恋人になることができない。

どうして女同士だつたのだろうか。せめて男なら容姿に恵まれなかつたとしてもチャンスがあつた。でも私にはそれすらなかつた。
「ゴメン、なんか……、眠くなつてきた、かも……」

彼女の言葉が途切れ途切れになり、次第に首が上下に揺れだした。全てを終えたら、どうしようか。

寝息を立てる彼女をベッドに運びながら考えた。罵倒されながら彼女の元を去つていくのはつらい。誰かに罰してほしい気もするが、彼女に嫌われるはこんなことをしておいてなんだが、耐えられそうになかつた。

死んで逃げるのも一つの手だ。

でもそれはさすがに彼女に負担を掛けすぎるような気がする。一生覚えていてもらえるかもしれないのは幸せだが、一生を縛り付けるのはさすがに申し訳ないような気持ちもある。

『全部終わつてから考えよう』

支離滅裂な思考に終止符を打ち、衣類を剥ぎ取つた彼女をベッドに横たえる。

私は白い裸体を隠すこともせず、ぐつたりと力を抜く彼女の首筋に吸い付くように唇を添えた。

「あの、高良美歩さんと四条波留さん、ガチで付き合つてるらしいよー」

――――――

「マジで！ 女子高だからあるかもとは思つてたけど……」

「しかも高良さんの方から中学の時に押し倒して、そして両思いが発覚して付き合いだしたんだって！」

「キヤー！ 何それ大胆！」

「本人たちに聞こえてるつて気づかないもんかな……」

「美歩が噂流したくせに何言つてんの」

呆れたようにため息を吐く彼女は、その姿さえ惹かれるものがある。私が虫避けに噂を広めると言つた時も、今と同じように苦笑いを浮かべていた。

「それにしても、随分マイルドな噂だねえ」

「まあ、これくらいにしとかないと引かれちゃうしね」

ホントは薬盛つて襲い掛かつたとはさすがに言えなかつた。今でも周囲にアピールするために一人で身体接触（イチャイチャ）を繰り返していたから、耐性のない人からは少し気味悪がられていると思う。

「あ、そうそう。今週の日曜は美歩、暇?」

「暇だけど……」

爛々と目を輝かせる彼女に、嫌な予感が芽生えた。

「じゃあうちで、シよ」

「待つて待つて、月曜小テストなんだけど」

「毎回満点の人人が何言つてんの」

「いや、けど、あれすごく疲れるから……」

本当に疲れるのだ。もう腕一本どころか指一本動かせない感じになる。瞼を開くこともただひたすら億劫で、声を出すために息を吸い込むだけで疲労感を感じるのだ。

でもその中ですら幸せに浸れるのだから、うまく断る言葉が見つからない。

「だいじょーぶ。美歩は何にもしなくていいから。私の腕の中で喘いで、かわいい姿を見せてくればそれでオッケー」

「波留さま、私が嫌がること好きなの?」

「美歩が可愛すぎるのが悪いんだよー。この前の、快感のキヤパオーバーでパニクつて声漏らしてるときとか、最っ高!」

痴態を具体的に言葉にされ、カツと顔が熱くなつた。

「偶には私にも攻めさせてよ」

「ええー。でも私は受けるより責める方が好きだな。それに実は美歩も『される』の、かなりハマつてるつしょ」

ぐう。

図星を突かれて言葉が出ない。

にいつと笑う彼女に恨めし気な視線を送る。ここで引いたら負けた気がするんだよな……。

「でも——」

「実は道具系に手を出しちゃつたから、試してみたいんだよね。美歩も使い心地、試してみたくない?」

こつそり耳元で囁かれる言葉に話を遮られた。

唾を飲み込んで、無意識にコクリと頷いてしまつた私は我に返つてから「ああ、もう負けでいいや」と小さく笑つた。

拝啓

二年前の私へ。

二年後の私は、今のあなたからでは信じられないほどの幸せを迎えています。

でも恋人がSつ氣たつぱりなので、今のうちから体力をつけておくことをオススメします。

敬具